第四回 常磐津八重太夫の会 番組表

第一部 伊勢音頭恋寝刃（油屋）より

（開演 午後一時三十分～）

一、神路山色琫（油屋）

（上の巻）酒宴の段

（浄瑠璃）
喜助・文重太夫
岩治・松重太夫
貢・万野・八重太夫
お紺・文字明重
麓・些・仲重太夫
治郎助・仲寿太夫

（三味線）
菊与志郎
東蔵
八重一郎

「解説」

天保九年（一八三八年）義太夫の「伊勢音頭恋寝刃」を瀬川如水が改作。安政二年五月、市村座で上演、好評を博した。常磐津豊後大掾・岸澤古式部合作。上の巻は伊勢の茶屋（料亭）油屋の酒宴の場で、名刀青江下阪の折紙（鑑定書）を手に入れた徳島岩治が豪遊している所えお紺が！お紺は二世を契った福岡貢のために、折紙を手に入れ様と苦心する。貢は青江下阪を差したまま油屋を!!

一、神路山色琫（油屋）

（下の巻）縁切の段

（浄瑠璃）
喜助・文重太夫
岩治・松重太夫
貢・万野・八重太夫
お紺・文字明重
麓・些・仲重太夫
治郎助・仲寿太夫

（三味線）
菊与志郎
東蔵
八重一郎

「解説」

場面は伊勢・油屋での続き。料理人・喜助が忠義を示し、お紺は腹黒き悪計にかかり、わざと貢とお鹿の間を疑い、心にもない愛想ずかし。この貢とお紺のやり取りで、お紺の心を知らず、本当に怒って、この場を皆に笑われながら立ち退く迄！

次はこの浄瑠璃の元となる「油屋事件」で十人斬の段と続く。

一、神路山色琫（油屋）

十人斬の段

（浄瑠璃）
喜助・文重太夫
岩治・松重太夫
貢・万野・八重太夫
お紺・文字明重
麓・些・仲重太夫
治郎助・仲寿太夫

（三味線）
菊与志郎
東蔵
八重一郎

「解説」

怒って一度帰った貢は、刀を取り替えられたと思い、戻って争ううちに、万野を斬る。岩治も斬り、次々と通りかかった連中を斬る！（十人斬）折紙はない！切腹しようとした時、喜助お紺が折紙を持ってくる。貢が斬った者すべて悪事の一味とわかり、めでたく収まる。

（休憩十分・解説五分）

第二部 創作曲と日舞

（開演 午後三時十五分～）

創作 一、この道を

（弾き語り）
八重太夫

「解説」

作詞は山田一郎。作曲は八重太夫。故常磐津仲太夫師匠より群馬・高崎で手ほどきを受け、小五で習い初めた頃の思い出を曲にしてみました。少しアレンジをして、間に常磐津の代表曲のサワリを入れました。又、三味線の練習も厳しく教えていただき、お陰様で、「弾き語り」ができる事で、芸は身を助くを実感し、今さらながら師匠の有難さを思うこの頃です。

一、神楽娘

（浄瑠璃）
八重太夫
文重太夫

（三味線）
菊与志郎
八重一郎

立方 若月富喜仙

「解説」

各地に昔からある神楽堂で、様々演じられる様子を、曲と日舞で一人の娘が表現するもので、昭和十年四月作。作詞は渥美清太郎。作曲は常磐津幹五郎となっています。お祭の境内で神楽面を使って「八岐の大蛇」の物語りをする趣向！四つの面を使いわける！

御祝儀 一、岸漣漪常磐松島（松島）

（浄瑠璃）
文重太夫
文字婦美

（三味線）
八重
八重一郎

立方 花柳静九郎

「解説」

日本三景の一つ、陸前（宮城県）松島の名勝風物を材としたもので、主に御祝儀曲として有名である。作詞者は河竹黙阿彌である。明治一七年頃、常磐津家元と岸澤派とが親睦の記念として作られた新曲である。作曲は五代目、岸澤式佐。

（午後四時半終了）